

キラキラ輝いてます！

—東日本大震災復興支援ボランティア編—

たとえひとつでもいい。できることをしたい。

関口 廣さん・恵子さん  
ゆるずの木台



シロ(左)とクロ(右)を引き取り育てている関口さん夫妻

「名前のない」犬と出会って

昨年5月、東日本大震災関連のひつこのニュースが関口廣さんの目に止まった。ニュースを見た関口さんは、震災で飼い主とはぐれてしまった犬のうち、小さい犬は引き取り手が早く見つかるが、大きい犬ほど引き取り手が見つからないことを知り、すぐに福島県のボランティアセンターに電話をかけ犬を引き取るこ

とを決めた。間もなくして現地のボランティアが、関口さんのお宅に2匹の犬を連れてきた。2匹とも、震災で飼い主と離れ離れになってしまった犬だ。「名前がわからないから、初めはいろいろ呼びかけてみました。でも、反応がなかったの、白い犬をシロ、黒い犬をクロと名づけました」と廣さんは言う。妻の恵子さんは、「連れてきたときは、2匹とも全く吠えず、ぴったりと身を寄せ合っていました。地震の恐怖体験から、全身を震わせていたこともありましたが」と当時の様子を振り返る。

1か月で仲良くなれた

連れてきたばかりのころと一番大きく変わったのは、犬たちの『目』だという。当初、シロをお風呂に入れようとした廣さんに、シロはつり上がった目と鋭いキバを向けた。一方でクロは、ストレスでしっほの毛が抜け落ちていた。そんな2匹だったが、1か月後には、2匹ともすっかり2人に慣れ、元気に駆け回るようになった。恵子さんは、「毎日だっ

とするようにしたおかげで、今では優しい目をするようになった。少し甘やかすすぎたことを反省しています」と笑顔で話す。

なぜ、犬を引き取ったのか

いろいろな被災地支援があるなかで、関口さん夫妻はなぜ、犬を保護することを選んだのか。その理由を尋ねたところ、「もともと動物が好きなんです。以前、人を噛んだことのある犬を引き取って大事に育てたこともあったので、どんな犬でも引き取れる自信がありました。また、仕事をしているので、被災地を訪れてボランティア活動をするのは難しかったというのも理由の一つです。その点、犬を引き取るならなんとかなるだろうと思いましたが」と廣さんが話してくれた。

もし、飼い主が現れたら！

2匹のことが大好きな関口さん夫妻だが、もし元の飼い主が現れたら、飼い主に返すことが一番だと考えている。実際、インターネットでクロのことを知った人が、福島から訪ね

てきたことがあった。「残念ながら先方が探している犬とは違う犬でした。しかし、探して来てくださる方がいるということは、それだけ犬を大切に思っている方がいるということとです。その気持ちが伝わり、とても嬉しく思えました」と恵子さん。廣さんは「飼い主が見つかって引き取ってもらうことができれば、また別の、心に傷を負った犬をうちが引き取ることが出来ます。それが理想です」という。

自分にできる支援をしよう

廣さんは毎日、犬たちを散歩に連れて行く。だが、散歩中に出会う人に犬を引き取った話をして、「そうですね。大変ですね」と言われてしまふ。どうすれば、「自分もしたい」という人がでてくるのか思案中だという。恵子さんも、「本当はもっと多くの犬を引き取りたいけれど、うちにはシロとクロのほかに、もともと2匹の犬がいるから、これ以上は無理です。もしも飼える人がいたら、1匹でも多くの犬を引き取ってもらいたいと思っています」と語る。

「犬を飼うことに限らず、小さなことでも出来ることはあります。皆がそれぞれに、たとえひとつでもいいから『自分に出来る支援をしよう』という気持ちになれたらいいですね」と2人は話してくれた。